



水族館
廃業後に
私たちが見
たハニー。

背景 — ハニーを救おう —

ハニーはハンドウイルカのメスです。2005年2月に和歌山県の太地町で仲間たちとともにイルカ追い込み猟で捕獲され、千葉県銚子市の水族館「犬吠埼マリパーク」に売られました。捕獲されたとき、既に妊娠しており、和歌山から千葉までの16時間にも及んだであろう長距離トラックの移動を身重のまま堪えたのです。その年の6月に男の子を出産、「マリン」と名付けられました。

ハニーは「ビー」や「エポ」「ラン」「エル」などのハンドウイルカたちや息子のマリンとともに犬吠埼マリパークで飼育されていました。マリンもイルカショーに出演し、「小さな男の子」と紹介されていたようです。ところが息子のマリンや仲間たちが相次いで死亡、2017年にはとうとう最後に残っていたビーも亡くなりました。ハニーは小さな水槽にひとりぼっちになってしまったのです。

仲間を失い、息子も失い、失意の中にあるハニーに追い打ちをかけるように、今度は

老朽化したマリパークが経営破綻。2018年1月に閉館となりました。

魚や動物たちの行く末が心配される中、マリパークはハニーをはじめとした飼育動物をどうするのか明らかにしないまま、動物の譲渡交渉を始めた水族館とも連絡を絶ち、口を閉ざしました。ハニーはぶかぶか浮いたままになり、日焼けによる背中の傷が深刻になる一方でした。日々の餌は与えられるものの、狭いコンクリートのプールに置き去りにされてしまいました。

イルカは社会的な絆の強い動物です。広い海を声で互いに呼び合い、遊び、餌を求めて移動します。狭い人工的な施設に閉じ込められることそのものがイルカにとって苦痛です。

その上、仲間もいない孤独な状態では身体的にも、精神的にも健康に暮らすことはできません。

キャンペーンスタートから水族館の再開ニュースへ

「閉館した水族館にイルカが孤独に取り残されている。しかも皮膚疾患があり、精神的にもまいっているようだ」

そのことを知った私たちは、早速現地へ行き、各方面に働きかけを行い、最終的にハニーを助けるためのキャンペーンを開始しました。「ひとりぼっちのハニー」は、国内や海外の多くのメディアによって報道され、一時は注目を浴びることになりました。この時のハニーは「世界で一番有名なイルカ」だったのかもしれませんが。

しかし1年が経過し、マリパークはハニーのより良い生活を願う人たちに対して心を閉ざし、一般公開はもちろんのこと、ハニー

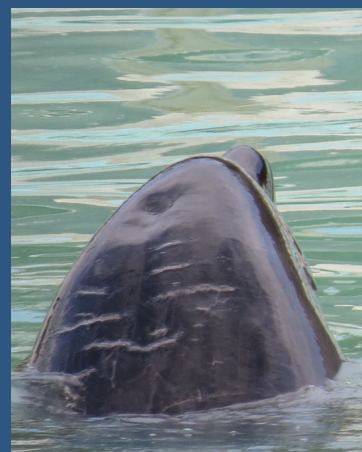
の状態などを明らかにすることまで拒んでいます。

そんな中、突然、今年の3月に水族館が転売され、再開されるという情報が流れました。実際、運営する株式会社の名前はそのままですが、登記上は別の人の名前が代表取締役として加えられており、具体的な再開手続きはまだなもの、近々に開園する可能性も出てきました。

そしてあろうことか、ハニーやペンギんたちを中国に売るという話も浮上しています。水族館ブームの中国ではイルカの需要が高まっており、ハンドウイルカは高額で売られています。

このニュースレターは、2018年1月31日、水族館廃業に伴って置き去りにされたハンドウイルカの「ハニー」をはじめとする、飼育下で様々な問題を抱えているイルカたちのより良い生活を皆さんとともに考え、そのためにできることを模索するために発行されます。みなさんの積極的な参加を願っています。

イルカは広い海を、血の繋がった仲間と社会的な群れをなして暮らしている。
水族館からサンクチュアリへの流れを日本にも！



去年、3月に私たちが見たハニーの傷



イルカの輸送箱
(実際にハニーの輸送に使われたものではありません)

© Heal The Oceans Japan

イルカの輸送のリスク

イルカの輸送の際は細長い棺桶のような箱に、身動きのできない状態で入れられます。水中を泳ぐイルカにとっては身体的にも精神的にも多大な負担がかかります。

また、皮膚の乾燥はイルカにとって致命傷となるため、常に水がかかけられますが乾燥のリスクは避けられません。体調の激変も十分にありうるため、健康チェックや点滴などが施されますが、その間は知らない人間に触られなければならないのです。

人間が自分の意思で移動するならば、たとえ長距離でも「あと何時間でつくかな」という予測をたてることができます。しかし、いきなり箱につめられ、エンジン音などの騒音の中にいるイルカはわけもわからず、どんなに不安なことでしょう。

中国に売られるとしたら、娯楽目的の水族館の人工的なプールでイルカショーや繁殖に利用されると思われます。ハニーはすでに長距離の移動の末、狭いプールに入れられるという過酷な経験をしています。ふたたび彼女に同じ悪夢をみせたくはありません。

ハニーの健康状態

ハニーの背中への傷は治癒してきており、昨年目撃された、やや斜めになって浮いたままになっている状態からは回復しているように見えます。ハニーの健康状態は、行政による定期的(1ヶ月1度程度)の視察でチェックされています。

しかし、これは不十分であり、私たちは次のステージに至る間にも、専門の獣医師によるきちんとした検査と、その診断結果の公開を求めています。

どうすればいいのだろうか？

ハニーが大きな話題になった時、その将来についてはいろいろな意見がありました。

- 他の(もっと飼育環境の整った)水族館などの飼育施設に買ってもらう
- 行政や篤志家が水族館を維持する
- 海にリリースする

答えを見出す前に、まずハニーをはじめとする一定期間飼育下に置かれた水族館のイルカたちにとって、どのような状態がベターであるかを考えてみたいと思います。

イルカたちの本来の生態や生活を思い出してみてください。

- **イルカは広い海を、血の繋がった仲間と社会的な群れをなして暮らしている。**
- **世界の暖かい海を中心に、たくさんの遺伝子の異なるイルカたちがいる！**

というところから、まずは基本的な「飢えないこと」や「外敵の脅威がないこと」とともに、もともと住んでいた海域に近い水質や水温であり、なおかつ汚染や騒音から隔離されている環境に移せることが望ましいと私たちは考えます。

長い飼育下の生活や仲間からの隔離によって、簡単に海に解放しても結果はイルカにとっても良くないことが想定されます。彼らには、「リハビリテーション」が必要です。

サンクチュアリへ向けてー

サンクチュアリとは「擬似自然保護区」のことをいいます。世界では、劣悪な飼育下に置かれた野生動物や畜産動物たちを保護し、積極的に本来の生息状態・生活環境に近いサンクチュアリに移す動きが大きくなっています。日本でも(施設は自然環境を囲ったものではありませんが)チンパンジーのサンクチュアリが熊本に作られました。

アイスランドにあるベルーガ(シロイルカ)のためのサンクチュアリでは、2頭のベルーガが中国から移送されました。今後の経過に注目です。アメリカのポルティモアでは、域内の湾を仕切ってサンクチュアリを作る計画が水族館主導で進められています。ハニーも、ここはひとつの選択肢でした。

しかし、輸送リスクや日本の飼育下にいるイルカたちのより良い生活を考えるなら、こうした計画を日本でも検討することがベストではないかと思えます。そのためには、まずは専門家との関わりや、日々のイルカたちの餌やりや健康面などの世話、そして候補となる海の確保等々、とても大きな解決すべき課題がたくさんあります。イルカを所有している事業者の理解も得なければなりません。そして資金ももちろん必要です。

でも、無理！と決めつけないで、できるところから始めてみようよ！というのがこのニュースの役割だと考えています。まずはサンクチュアリというものを知ってもらうところから。

そして、皆さまの知恵とお力をお貸しください。

「日本にもイルカサンクチュアリを！ハニー通信」第1号 2019年7月1日発行(不定期発行)

ニュース配信もしくは配信停止をご希望の方は、info@animals-peace.netまでご連絡ください。

発行人/PEACE 命の搾取ではなく尊厳を 代表 東さちこ & 認定 NPO 法人アニマルライツセンター 水族館問題担当 光延晶子